



1 序盤、遠田は下段蹴りを徹底して放ち、木村のフットワークを封じる。2 木村も要所でヒザ蹴り、後ろ廻し蹴りを放つなど反撃を試みるが、決定打にはならず。3 終盤にギアを上げた遠田は、下段蹴りや突きに加え、上段への蹴りで攻撃を展開。本戦5-0で完勝を取めた。4 一般無差別級の部入賞者。左から準優勝の木村、優勝の遠田。5 昨年の3位からジャンプアップをはたした遠田。父である遠田真司道場長と、一枚の写真に収まった

一般無差別級の部決勝戦
遠田竜司 VS 木村捷旭
本戦5-0

遠田竜司が、昨年の雪辱をはたす無差別初V 夢へと導く「己を信じる心」

Text&Photos / 森本雄大

どんな時も折れない自信は、己を信じる心から生まれるのかもしれない。第7回世界ウエイト制大会の目前となる9月18日、各地の強豪が集結した全北陸大会では、それぞれの思いがぶつかり合った。

そんな中、ひととき強い決意で大会に臨んだのが、前回大会3位の遠田竜司だ。小学3年生からドリムフェスティバルで優勝を重ねたが、一般部デビューとなった第6回JFKO全日本大会からは苦戦が続く。とくに第7回JFKOで多田成慶と対峙すると、その強さを肌で感じた。「動画は何度も見ましたが、実際に闘うと全然違いました。身をもって、本当の空手を体験したと思います」

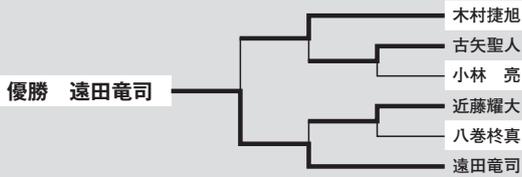
悔しさを糧に、今年7月のドリム2022高校生男子重量級を制覇。ドリムV5の実績を引っ提げ、今大会の一般無差別級制覇に挑んだ。

初戦となった準決勝では、一回戦で技有りを獲得して上がってきた近藤藤耀大と対戦。打撃音が響くほどの下段蹴りや渾身の突きでペースを握ると、最後はラッシュでまとめて完勝。見事に決勝進出を決めた。

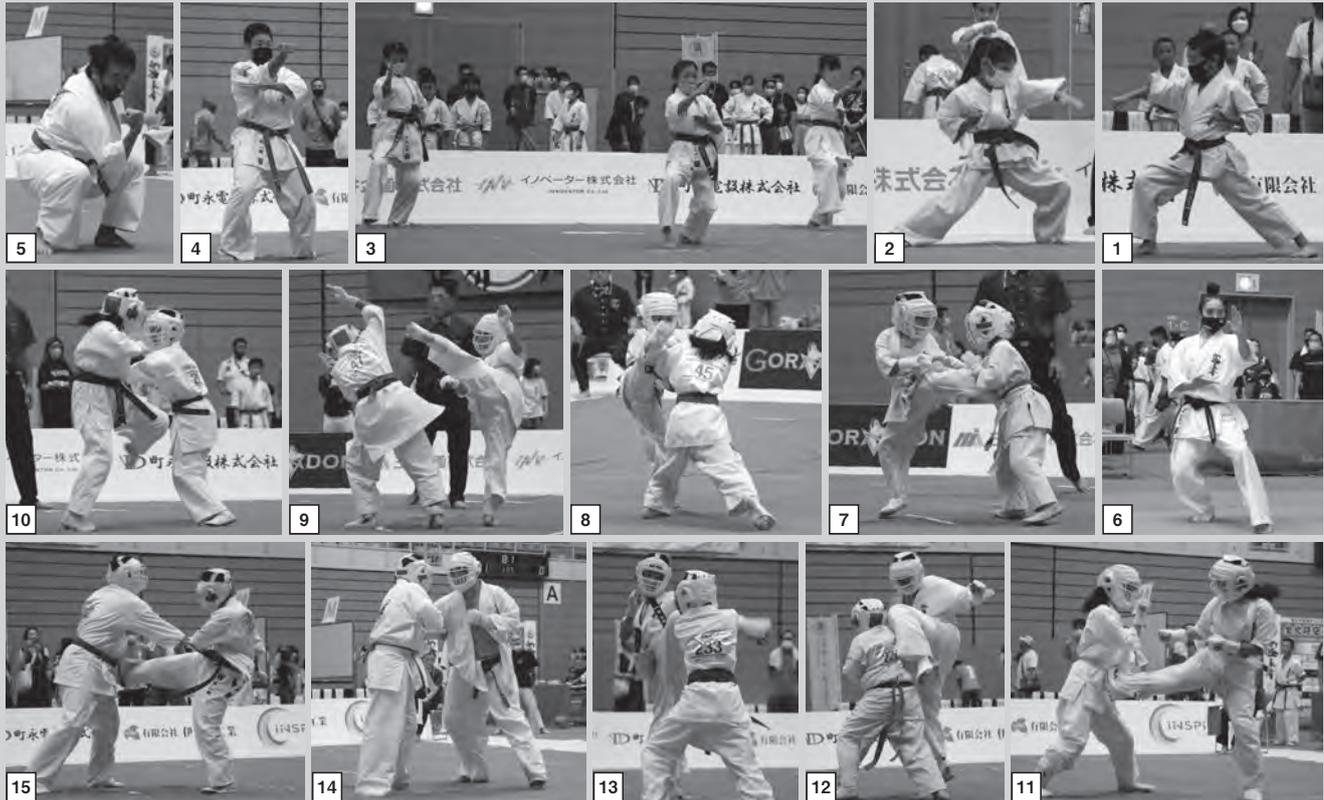
逆ブロックから上がってきたのは、2019年の全北海道大会一般軽量級ファイナリストである木村捷旭。「北海道代表として負けるわけにはいかないと思いました」と話す木村は、準決勝でドリム2022学生男子重量級準Vの古矢聖人を撃破。安定感のある組手で決勝に進んだ。

一般無差別級の部

優勝 遠田竜司 準優勝 木村捷旭



6副賞の米俵を担ぎ上げる遠田。「今日は父の誕生日だったので、お米をもらえてうれしいです。家族でいただきます」と笑顔を見せた。7準決勝で木村と対峙した、ドリーム2022学生男子重量級準Vの古矢聖人。積極的に攻めるも力及ばず、決勝を前に姿を消した。8近藤耀大は準決勝で遠田と対戦。遠田の猛攻に応戦するも、決勝進出はたすことはできなかった



1前田遥斗と小堀暖馬の対決となった、型小学3・4年初級の部。小堀が判定5-0で優勝をはたした。2型小学1・2年上級の部では、浅沼心と竹内碧が対戦。キレのある平安2で浅沼が頂点に立った。3東京東と東京豊島が優勝を争った、型団体の部。一条乱れぬ動きで、東京豊島(下田理那、大門優里、佐志田ゆい)が勝利を手にした。4型中学・高校生上級の部では、星芽里と林一樹が対峙。林が気迫のこもった五十四歩で優勝をつかみ取った。5型シニア(40歳以上)上級の部で頂点に立った金田芳朋。決勝では江口江美との対決を制した。6型一般上級の部では、入来智羅咲が佐藤りさを破り優勝。昨年の型一般女子上級の部での戴冠に続き、今大会でも結果を残してみせた。7幼年の部では、上段横蹴りで技有りを奪った羽鳥拓海が坊下蒼太郎を破って優勝。8小学2年女子の部では、浅沼心が若山未月を下して戴冠。型小学1・2年上級の部との2冠を達成した。9小学4年男子上級の部で頂点に立った塚本幸村。延長の末、同い年の柏木桜太郎を判定4-1で下した。10地元勢の意地を見せた花岡愛菜。中村芽衣沙を本戦5-0で破り、小学5年女子上級の部の優勝に輝いた。11小学6年女子上級の部では、佐藤天音と山木遥奈が対戦。下段蹴りと突きで攻めた佐藤がトロフィーを獲得した。12突きとヒザで攻め立てた古谷侑大が、決勝で柿沼栄輝に勝利。小学6年男子重量級の部で優勝を手にした。13多彩な足技で合わせ一本を獲得した田中漣。藤巻銀也を制して、中学2年男子軽量級の部で栄冠をつかみ取った。14中学3年男子重量級の部では、渡辺一心が藤森文毅を本戦5-0で破り、優勝に輝いた。15手に汗握る攻防が繰り広げられた、高校男子重量級の部。地元・新潟支部の林一樹が、延長の末に松原瑠之介に勝利し優勝をつかんだ

各々が結果を糧に、次への一步を踏み出していく。その中でも遠田が手にした栄冠は、夢への大きな糧となるだろう。次世代のホープが見せる今後の活躍に期待大だ。

一方で敗れた木村も、「今回の反省を活かし、次に向けて稽古していきます」と力を込めた。全日本大会は学業の兼ね合いで出場できないが、来年のJFKOでの再浮上を狙う。

「日本代表に選ばれる選手の試合を見てみると、どんな時も自分を信じる気持ちを持っていて感じました。自分も見習って、一歩ずつ前に進んでいきたいです。12月の全日本大会では上位に進出して、世界大会に出られるようにがんばります」

決勝は序盤から、一進一退の攻防が展開された。フットワークを交えて攻める木村に対し、遠田は左の下段蹴りを連打。徐々に木村の動きを封じることが成功する。下段蹴りや胸への突きで攻める遠田に対し、木村は後ろ廻し蹴りなどで応戦するも決定打にはならず。ラスト30秒で回転を上げた遠田が突きとヒザ、最後は廻し蹴りを放ち、本戦5-0で一般無差別初優勝を手にした。

試合後「優勝できてホッとしています」と笑顔を見せた遠田。結果が出ない時期にもめげず、壁を乗り越えてみせた。そんな彼を支えたのは「無差別級王者」という明確な夢と、日本代表としてトップを走る先輩たちの姿が大きかった。



○ 北嶋治将 VS 藤原峻祐 ×
（東城南川崎支部）（練馬支部）
本戦5-0

一般軽量級の部決勝戦



1 得意の下段蹴り、胸への突きを軸に攻めた北嶋。序盤は藤原のスピードに苦戦するも、じわじわとペースをつかんでいく。2 鋭い突きを放つも、ダメージが蓄積したが徐々に脚が止まる藤原。3 北嶋は最後まで、下段蹴りと胸への突きによる攻めを徹底。圧力をかけ続け、本戦5-0で勝利を取めた。4 東城南川崎支部で日々鍛錬を積んでいる北嶋。トロフィーを手に、入来武久支部長と記念撮影を行った。5 一般軽量級の部入賞者。左から準優勝の藤原、優勝の北嶋、3位の宇佐美と鈴木。6 鈴木羅琥斗は、準決勝で藤原と練馬支部の同門対決を展開。鋭い攻撃を仕掛けるも、決勝進出はならなかった。7 一回戦を突破するも、準々決勝は棄権となってしまった宇佐美大鳳。他の選手の欠場もあり、3位の表彰台に登った

一般軽量は北嶋治将、女子フルコンは村林千紘が制す 「選手第一の大会」で新世代躍動

古川章支部長の「選手の目標にあってほしい」という願いを込め、2014年から開催されている全北陸大会。選手が参加しやすいよう、開催日を毎年9月の第3日曜日に設定し、コロナ禍でも安心・安全な大会をモットーに感染対策を徹底するなど、まさに「選手ファースト」での大会運営が行なわれている。

本大会の歴代優勝者を見ていくと、第2・4・5回大会の一般無差別級王者である賀教拓海や、第7回大会で同階級を制した吉澤穂高、同じく第7回大会の一般軽量級で優勝した飯野駿といった、多くの日本代表選手を輩出している。選手を大切にすることをからこそ多くの強者が集い、経験を糧に大舞台へと羽ばたいていくのかもしれない。

そんな全北陸大会も今年で8回目。一般軽量級の部で決勝に駒を進めたのは、昨年の同階級準Vかつ、今年のドリム2022で高校生男子中量級を制した北嶋治将だ。

「昨年は（飯野）駿先輩にボコボコにされてしまったので、今回こそ必ず優勝する気持ちで臨みました」

胸への突きと下段蹴りを武器に、一回戦は深沢優人を、二回戦では高橋陸登を撃破。準決勝は宇佐美大鳳の棄権により、決勝進出が決定した。決勝では、練馬支部・鈴木羅琥斗との同門対決を制して勝ち上がった。藤原がスピードを活かした突きの連打



10



9

8「昨年の全関東大会から優勝できていなかったで、今回は絶対に獲ろうと思っていました」と話す村林。鋭い突きの連打で攻め立て、見事に優勝を手にした。
 9小学校時代、村林と対戦していたという奥村。「前よりは自分の闘いを出せたので、次こそ勝てるよう稽古していきます」と前を向いた。10一般女子(高校～35歳未満)フルコンタクトの部の入賞者。左から準優勝の奥村、優勝の村林



○村林千紘VS奥村杏俐
(東京都立大) (東京都立大)
 一般女子(高校～35歳未満)フルコンタクトの部決勝戦

本戦3-0

8



13



12



○山崎麻由VS尾形昌美
(神戸市立) (神戸市立)
 一般女子(35歳以上)フルコンタクトの部決勝戦

本戦3-0

11

11一般女子(35歳以上)フルコンタクトの部では尾形昌美と山崎麻由が決勝で対戦。一進一退の攻防を制した山崎が、同階級の頂点に立った。12突き、蹴りともに手数で攻めた尾形だが、あと一步頂点には届かなかった。13一般女子(35歳以上)フルコンタクトの部の入賞者。左から優勝の山崎、準優勝の尾形。141部と2部の間には、チャリティー基金贈呈式が開催された。セレモニーに先立ち、中原八一新潟市長から選手へのエールが贈られた。15古川支部長、石川志郎大会会長より、中原新潟市長と高橋直揮大会顧問にチャリティー基金が贈呈された。16「安心・安全な大会」をモットーとして開催された今大会。入口での検温の徹底など、万全な感染対策が施された。1718会場内では「銀イオン」による感染対策が実施された。会場で噴霧された銀イオン製品「銀精-ginsei」は、銀と精製水だけでつくられた除菌・消臭剤。除菌や抗菌の作用が強く、アレルギー反応も出にくい。加えて塩素のような嫌な臭いがしないことが特徴だ



15



14



18



17



16

で優勢となるも、北嶋は動じず胸への突きと下段蹴りを繰り返していき、ダメージが蓄積したか、藤原のフットワークが止まると北嶋が主導権を握り、本戦5-0で勝利を収めた。

「東京城南川崎支部には日本代表選手が6人もいるので、自分も先輩方に追いつき、追い越せるようにがんばります。11月の全関東大会では軽中量級に出場するので、優勝を狙っていきます」と北嶋。先輩への敬意を表し、次の目標を語った。

一般女子フルコンタクト(高校～35歳未満)の部には、ドリーム6連覇の実績を持つ村林千紘が参戦した。鋭い突きの連打と多彩な足技で決勝に進出すると、小学校時代に拳を交えた奥村杏俐と激突。激しい打ち合いを制して優勝をはたした。

「ドリーム2022で負けて悔しかったので、今回はリベンジをかけて臨みました。次は12月の全日本大会で結果を残せるようがんばります」

一方、一般女子フルコンタクト(35歳以上)の部決勝では、山崎麻由と尾形昌美が王座を争った。手数で攻める尾形に対し、山崎は怯まず前に出て応戦。最後まで圧力をかけ続けた山崎が優勝をはたした。

一般無差別級優勝の遠田竜司を始め、北嶋や村林も将来を期待されてきた選手だ。大会を通じて選手が力をつけ、次の高みへと向かう。温かな心が紡ぐ全北陸大会は、今後も多くの逸材を育てていくだろう。